

優秀演題抄録

15 多発性硬化症患者に対する、新たな排泄方法獲得に向けた関わり

【演者】佐川 茜 【所属】会田記念リハビリテーション病院

【共同演者】渡邊 佑香里（作業療法士）

【キーワード】排泄、QOL、

【はじめに】

多発性硬化症は、寛解と増悪を繰り返す経過と多様な症状や障害等により、挫折感や心理的ストレスが強い疾患であるといわれる(池ノ谷真里、2012)。今回、自己導尿の希望が強いが獲得困難な70歳代女性に対し、真のニーズに沿った目標設定と介入により生活の質の向上が図れた。症例から同意を得て以下に報告する。

【症例紹介】

10数年前に多発性硬化症を発症。寛解と増悪を繰り返すも日常生活動作は自立し自己導尿をしていたが、再燃にて急性期病院入院。2か月後に当院転入院。

【初期評価】

参加：在宅生活継続困難。活動：排尿；膀胱留置カテーテル(以下カテーテル)。排便；トイレ見守り。食事・整容；自立。他介助。心身機能：運動麻痺；なし。筋力；徒手筋力テスト上下肢3、体幹2。感覚；上下肢・陰部の重度鈍麻・異常感覚。運動失調；上下肢に軽度。手指機能；巧緻性低下。精神機能；改訂長谷川式簡易知能評価スケール30点、老年期うつ病評価尺度5点。環境因子：夫と長男と3人暮らし。夫は仕事と家事を両立。個人因子：楽観的で危険認識が乏しい。本人の希望：自己導尿がしたい。

【目標】

自宅退院。夫の一部介助で生活し、車いすと歩行器を使用。排泄は準備・片付けは夫、それ以外は自立。

【経過】

初期：人目や臭いを気にしてカテーテルを「早く外したい」と訴えあり。1か月後自己導尿を始めるも、動作拙劣で一部介助を要し、尿路感染リスクが高かったが「上手でしょ」「一人でもできるよ」と現状理解に乏しい状況。現状理解の促しと心理面を考慮し導尿関連動作の訓練を行っていたが、尿路感染にてレベル低下し再びカテーテルとなる。起居も困難で「私は悪くなる病気だから」と涙ぐむ場面もあった。その後も状態不安定で、導尿は不可能となった。導尿希望より「一人でもできるのに」と漏らすことが増え、人の手を借りずに排泄ができることを真のニーズと捉え、レッグバッグの尿破棄自立を新たな目標とし介入した。中期：安全な座位での方法や、尿廃棄用の道具を提案。また、病棟と連携し日常の排泄でも環境と手順を統一した。介入中、「もっと台は高いほうがいい」等の発言も聞かれ始め、カテーテルを自然と受け入れていった。後に自宅への外出同行を実施。自宅により近い設定で反復訓練を行い、安全な動作の定着に繋がった。後期：日中の尿破棄自立し、外泊で動作を確認。退院まで安全に行えた。悲観的な発言は減り「足台があるから疲れない」「一人でも上手にできるよ」と前向きで笑顔が増えた。

【結果】

入院から4か月後自宅退院。現在も一人で尿破棄ができている。

【考察】

自己導尿ができず挫折感を感じていた本症例に対し、経過に沿った症例との関わりの中で排泄自立という真のニーズを見出し、身体機能に合った方法や道具の提案と環境調整、病棟との連携を行った。これにより、新たな排泄方法を獲得し、生活の質の向上に繋がったと考える。